

# 『國民讀本參照國語科話方教材』 之探討

## —— 初版卷一、卷二為主 ——

江 秀 姿

久留米大學比較文化研究科博士生

### 中文摘要

明治三十一年「台灣公學校令」發布後，台灣初等教育機構「公學校」制度正式實施。此時，日語教育衍生出名為“Gouin Method”的嶄新教學法，並因應此一教學法而編撰新教科書《臺灣教科用書國民讀本》，共有十二卷。同時，編撰了一套《國民讀本參照國語科話方教材》（國民讀本參照國語科說話教材）為該教科書的副教材。本論文擬以該套書中初版的卷一與卷二為主要的分析資料，針對該教材各課的配置、說話場景、文法項目、假名表記、句詞的分隔方式、詞彙分析、使用該書的教學法、以及與《臺灣教科用書國民讀本》之間的關係進行探究。

關鍵詞：話方教材（說話教材）、《國民讀本》、Gouin 式語言教學法、  
說話場景、文法項目、詞彙分析

# 『國民讀本參照國語科話方教材』 の一考察

## — 初版巻一・巻二を中心に —

江 秀 姿

久留米大学大学院比較文化研究科博士生

### 要 旨

明治三十一年「台湾公学校令」の発布により、台湾における初等教育機関「公学校」の制度が本格的に実施された。この際、日本語教育のために新しく生み出されたのが「ゴアン氏言語教授法」という教授法である。また、それに応じて、編纂された教科書が『臺灣教科用書國民讀本』全十二巻である。更に、この教科書の副教材として編纂されたのが『國民讀本參照國語科話方教材』である。本稿では、その話し方教材の初版の巻一・巻二を中心に、教材の配置、場面設定、文法事項、仮名遣い、分かち書き、語彙分析、指導法などの面について分析し、また『臺灣教科用書國民讀本』との対応についても考察したい。

キーワード：話し方教材、『國民讀本』、ゴアン氏言語教授法、場面設定、  
文法事項、語彙分析

# **A Study of the Conversational Textbook “Hanashikata Kyouzai”**

Chiang, Hsiu-Tzu

Graduate student of Kurume University

## **Abstract**

The elementary educational system “Public School” in Taiwan was started by the promulgation of the Regulations for Public Schools in Taiwan in 1898, the new teaching method called “Gouin Method” also came into practice. As a result, a series of new textbook (entitled “Kokumin Dokuhon”) for teaching Japanese to the pupils in Taiwan were compiled and published, composed of twelve volumes. Almost at the same time, a series of complementary textbooks on conversation (entitled “Hanashikata Kyouzai”) were also published. The study of the present paper is focused on the volume one and volume two of the first edition. In order to understand the actual conditions of the teaching of Japanese education at that time, we will analyze the arrangements of the teaching material, conversational situation, grammatical points, the Japanese syllabary, word segmentation, basic vocabulary, teaching methodology and their relation to the contents of “Kokumin Dokuhon.”

**Key words:** the teaching material for speaking Japanese in Hanashikata Kyouzai, Kokumin Dokuhon (the textbook used for teaching Japanese in Taiwan public schools soon after the occupation of Taiwan by Japan), Gouin Method, conversational situation, grammatical points, basic vocabulary

# 『國民讀本參照國語科話方教材』 の一考察

## — 初版巻一・巻二を中心に —

江 秀 姿

久留米大学大学院比較文化研究科博士生

### 1. はじめに

1894 年に勃発した日清戦争の結果、1895 年に清朝が敗れ下関条約によって台湾が日本に割譲された後、第二次世界大戦の終戦までの 50 年に及ぶ日本の台湾統治が始まった。台湾の植民地支配は日本にとって未曾有のことであり、日本側は領台開始に先立って台湾の言語状況を正確に把握していたわけではなかった。それ故、日本語教育を推進するために、明治 28 年 7 月 16 日に芝山巖学堂で授業が開始され、主に「対訳法」を用いて日本語が教授された。つまり、日本語を台湾語に訳して聞かせたり、台湾語のこういう言葉は日本語ではこういう表現をするのだと説明したりするような教え方であった。しかしながら、後に明治 31 年発布された台湾公学校規則によって、生徒の就学年齢が小学校の低学年まで下がったので、一般の生徒に漢字漢文の素養を期待することができなくなり対訳法の使用は困難になった。これに台湾語に十分堪能でない教師の数を加えると、日本語の教授は一層困難になる。こうした状況で新しく生み出されたのがいわゆる「ゴアン法」という教授法であり、その実践の中心になったのは山口喜一郎氏であった。この教授法の影響によって、

台湾總督府學務課は『ゴアン氏言語教授方案』『臺灣公學校國語教授要旨』といった指導書を出版し、更に台湾で最初の公学校用国語読本である『臺灣教科用書國民讀本』（以下『國民讀本』と略称する）をも編纂した。そして、この教科書の副教材として編纂されたのが『國民讀本参照國語科話方教材』（以下『話方教材』と略称する）全六巻である。本稿では、『話方教材』初版の巻一・巻二を中心に、これら教材の配置、場面設定、文法事項、仮名遣い、分かち書き、語彙分析、指導法などを分析し、また『臺灣教科用書國民讀本』との対応についても考察してみたい。

## 2. 公学校における話し方教育

明治 31 年 7 月 28 日勅令第 178 号を以て台湾公学校令が發布された。これにより、国語伝習所を公学校に改設し、台湾人に対する初等教育機関となった。同年 8 月 16 日府令第 78 号を以て台湾公学校規則が發布された<sup>1</sup>。その主旨を見れば、「公学校ハ本島人ノ子弟ニ徳教ヲ施シ実学ヲ授ケ以テ国民タルノ性格ヲ養成シ同時ニ国語ニ精通セシムルヲ以テ本旨トス（後略）」と定めている。生徒の年齢は八歳以上十四歳以下で、修業年限は六年である。教科目としては、「修身、国語、作文、読書、習字、算術、歌唱、体操」が示されている。国語、作文、読書、習字の国語科関係の科目は、それぞれ話し方・綴り方・読み方・書き方の教育を担っていた。一週間の国語全科教授時数の中に「国語・作文」に配当する時間数は、第一・二学年は 5 時間（「国語・作文」の時間数）／21 時間（国語科全体の時数を表わす）、第三・四学年は 6 時間／22 時間、第五・六学年は 9 時間／23 時間となっている。

---

1 臺灣總督府民政局學務課『臺灣學事法規』（1901）pp. 102-110。

次に、話し方科教授要旨を見ると、「本科ノ目的ハ、本島ノ児童ヲシテ、国語ヲ学ビテ、聞イテ能ク他人ノ意ヲ解シ、言ヒテ能ク自己ノ志ヲ述ブルコトヲ得シメ、兼テ、国語全科ノ基礎ヲ與フルニ在リ」<sup>2</sup>と書かれているように、話し科の授業に聞く能力・話す能力の養成が含まれ、この科目を基本として国語科全体の教育を導くのである。また、教授方針としては、入校の初めから学校内における日々の行動の言い方を教授すると同時に、五十音の読み書きをも教える。次に既知の動詞を用いて短文の読み書き、書き取りの教授に入る。このようにして三年の間に学校内用語より日常用語の大体が習得できることが分かる。

### 3. ゴアン氏言語教授法

ゴアン氏言語教授法は明治 32 年の初めごろ国語学校教諭橋本武氏の紹介によって、同年 4 月から国語学校第一附属学校において実地教授の研究を行い、良好な成績をあげたという。実地教授を担当したのは山口喜一郎を始め、前田孟雄・鈴木金次郎・岡本要八郎などの諸氏であった。山口氏は、台湾が植民地になった直後の 1896 年に第二回講習員として渡台し、後に直接法を日本語教育に導入した第一人者として知られている。

ゴアン法では、基本的に幼児がその思考の過程と順序に従って言語を使用するのに倣って、学習者に言葉を習わせようとした。例えば、次のような一連の発話。「ホン　オ　ダシマス、ホン　オ　オキマス、ホン　オ　アケマス、ホン　オ　ミマス、ホン　オ　ヨミマス、ホン　オ　トジマス、ホン　オ　シマイマス。」<sup>3</sup>において、まず、これらの発話を教師が実地に動作しながら、日本語で発音して生徒に

---

2 『臺灣公學校國語教授要旨』（1900）p. 13。

3 『國民讀本參照國語科話方教材』卷一（1900）の緒言 p. 3。

聞かせる。次に、生徒に教師のこれら一連の動作について日本語で説明させたり、教師が日本語を使って生徒にこれらの動作を次にさせたりしながら日本語を覚えさせるという教授法である。この方法は領台直後から日本語教育に用いられていた「対訳法」を脱して、学習者になるべく母語である台湾語への対訳に頼らず、直接に目標語である日本語を使用するように考案されたものである。

ゴアン法はもともとフランス人フランソア・ゴアンが提案した『言語教授及び研究法』に基づくものであるが、国語学校教諭橋本武氏によってその内容が抄訳された。総督府はこの新しい教授法を一般に普及させるために、明治 33 年にこの訳本を『ゴアン氏言語教授方案』として刊行し、更に『臺灣公學校國語教授要旨』をも発布した。この要旨に基づいて編纂された教科書が『國民讀本』全十二巻および『話方教材』全六巻である。

日本領台初期の台湾で使われた国語（日本語）教科書には、『日本語教授書』・『新日本語言集』・『臺灣適用會話入門』・『小學讀書教授指針』などの教材が見られるが、中には当時日本で使われていた『小学読本』を台湾語に訳して改編されたものもある。当時これらの教科書を使い日本語と台湾語間の対訳法で日本語の音声や読み書きの練習を行ったのである。この教授法の目的は日本語の全体的な能力を養うことにあり、「聞く・話す・読む・書く」の四つの言語技能の中で特に何かを中心に焦点を置いたわけではなかった。しかし、そうした教科書の中には、文型を中心に編纂された『臺灣適用會話入門』の外に、「会話」という名で編纂された日本語の教科書はなかった<sup>4</sup>。それ故、明治 33 年以降ゴアン氏言語教授法を元にして編纂・出版された『話方教材』は日本が領台以来、会話の学習を中心に系統的に作った最初の会話教科書であると言えよう。

---

4 その中には『日台会話入門』などの教材も見られるが、それはここで言う台湾人学習者向けの日本語教材と違って、日本人向けの台湾語学習用のものである。

## 4. 『話方教材』について

本書の編者は台湾総督府民政局学務課が担当し、台湾日日新報社の印刷によって、明治 33 年 10 月 15 日に巻一、明治 34 年 6 月 7 日に巻二、明治 35 年 1 月 14 日に巻三が出版された。本の大きさは横 12.5 センチ・縦 19 センチの洋装本であり、当時国語学校教諭であった山口喜一郎氏によって編纂されたものである。巻一（初版）の緒言に掲げられた「全編三冊毎冊一学年ノ教授ニ充ツ」の内容を見ると、当時『話方教材』全三巻が氏によって編纂された経緯が窺われる。一方、『話方教材』の巻数については、『台湾に於ける国語教育の展開』（1931, pp.474-475）の中に、更に巻四上下と巻五上下が明治 36 年に、そして巻六が明治 37 年に発行されたことが記されているが、これは恐らく最初は三巻だけ編纂するつもりであったのが、その後の必要に応じて巻六まで編纂されたのであろう。また、『日本語教育の実際』（1939, p.284）にも明治 35 年 1 月 14 日に巻一・巻三、同年 11 月 10 日に巻二が出版されたという内容の記載が見られるが、これは前述した巻一と巻二の発行年次と食い違うことから、明治 33 年と 34 年にそれぞれ初版の巻一と巻二が刊行された後、明治 35 年に再び異なる版の巻一と巻二が出版されたものと推測できよう。またこの際、元来の三巻仕立てから六巻仕立てに改変されたのではないかと考えられる。本稿で考察するのはその初版の巻一及び巻二である。

### 4.1 教材の配置

同書の巻一は第一学年の前半期と後半期用に分けられて、その半学年の内容はそれぞれ『國民讀本』の巻一・巻二と対応している。即ち、『話方教材』一卷の内容は『國民讀本』二巻の内容に対応している。教材の構成は、各巻の關頭に全ての教



材<sup>5</sup>の題目が掲載され、本文の部分は一連の動作を表わす叙述文とその各場面での会話内容からなっている。そして、本文の後には、現場の教師のための注意事項が提示されている。

『國民讀本』編纂例の第二に「此書ノ前半、即チ、第一卷ヨリ第六卷マデハ、話方科ト相提携シテ、国語ノ基礎ヲ立テントスルモノナリ。」<sup>6</sup>と記されているように、『話方教材』は『國民讀本』の補助教材として使われたので、両者における各課の内容は常に対応に編纂されている。両者の対応を整理してみると、下の表 1 のようになっている。より簡単に対照するために、対応する各課の題名を同じ行に並べた。

(表 1) 『國民讀本』巻一～巻四及び『話方教材』巻一～巻二における目次

國 民 讀 本			話 方 教 材 (初版)		
巻	課	題 名	学 期	課	題 名
巻一 <sup>7</sup>			第一学年前半期	1	、、、、、、
				2	レイオシマス
				3	ホンオヨミマス
				4	① セキバンオダシマス ② セキバンオシマイマス
				5	スミオスリマス
				6	ジオカキマス
				7	① ドオグオダシマス ② ドオグオシマイマス
				8	① キョオジョオニハイリマス ② キョオジョオオデマス
	1	オキマシタ		9	オキマス
	2	キモノオキテイマス		10	キモノオキマス

5 ここでいう「教材」は同書の本文を意味している。

6 『臺灣公學校國語教授要旨』(1900) p. 23。

7 巻一・二は各課に題目がないが、ここでは『話方教材』の題名と対照するために、便宜上その内容を簡易な文で表わすことにする。

	3	カオオアラッテイマス		11	カオオアライマス
	4	ソオジオシテイマス		12	ソオジオシマス
	5	メシオタベテイマス		13	メシオタベマス
	6	アチラカラコチラエキマス		14	ガッコオエユキマス
	7	ホンオヨンデイマス		15	ホンオヨミマス
	8	コマオマワシテイマス		16	コマオマワシマス
	9	ランプノシタニ、ハナシオシテイマス		17	ヒオトモシマス
	10	ネルトキニ、チチハハニレイオシマス		18	ネマス
巻二	1	ヒガデマシタ	第一学年後半期	1	アサ、オキマス
	2	カオオアライマシタ		2	カオオアライマス
	3	カエリマシタ		3	アタマオソリマス
	4	ハヤクオイデナサイ		4	マエノツズキ
	5	カゴニノリマス		5	カゴニノリマス
	6	ハナシオシテイマス		6	オキヤクガキマス
	7	オキヤクサマガカエリマス		7	オキヤクガカエリマス
	8	ヒオオコシテイマス		8	ヒオオコシテ、ユオワカシマス
	9	チャオツギマス		9	チャオイレテ、オキヤクニアゲマス
	10	カミオカッテキマス		10	カミオカイマス
	11	チョオメンオツクリマシタ		11	チョオメンオツクリマス
	12	タコオツクリマス		12	タコオツクリマス
	13	タコオアゲテイマス		13	タコオアゲマス
	14	アメガフッテイマス		14	① アメガフリマス ② アメガハレマス
	15	ヒガヤマエハイリマシタ		15	ヨル、ネムリマス
巻三	1	ヨアケ	第二学年前半期	1	アサ
	2	アサガオ		2	① トオアケマス。 ② ソオジオシマス。
	3	アサノシゴト		3	ニワトリ
	4	ヒヨコ		4	① ニワトリオダシテヤリマス ② ニワトリニエオヤリマス
	5	キレイニナサイ		5	① カオオアライマス ② カオオアラウトキノハナシ
	6	アサメシ		6	① 食事ノトキ母ト子供トノ会話 ② 学校エユクトキノ会話
	7	ベンキョオスルセイト		7	ホンオヨミマス
	8	タロオ			

	9	ハシラオニ		8	ハシラオニオシマス
	10	テナライ		9	①テナライオシマス ②ウチエカエリマス
	11	ギョオギノヨイコ		10	①カシオカイニユキマス ②カシオカウトキノ会話
	12	シャボンダマ		11	シャボンダマオフイテアソビマス
	13	メカクシ		12	メカクシオシテアソビマス
	14	ウオ		13	ツリニユキマス
	15	ウオツリ		14	ウオニツイテノ会話
	16	ヒグレ		15	ユウガタ
	17	ヨル		16	一日ノシゴト
				17	ネマニハイッテネムリマス
巻 四	1	アサ	第 二 学 年 後 半 期	1	カワエミズクミニユキマス
	2	カワノケシキ		2	コドモガミズガメニオチマシタハ ナシ
	3	ミズガメオワルー		3	ミズオノンデ、ビョウキニナリマ シタ
	4	ミズガメオワルニ		4	①コメトギ ②コメトギノ会話
	5	ミズ		5	①マキオワリマス ②マキワリノ会話
	6	ゲジョトイヌ		6	①サイオニマス ②メシオタベルマエトノチノコト
	7	マキワリ		7	メシタキ
	8	ニンギョオノオキヤク		8	①ブタノニクオカイニユキマス ②ニクヤトオキヤクノ会話
	9	メシタキ		9	ヒャクショオトコドモノ会話
	10	ブタ		10	ウマイメシ
	11	ナ		11	同上、チチハハトコドモノ会話
	12	ウマイメシ		12	①ザボン ②ザボンオダベマス
	13	ウマイメシニ		13	①コロンドキモノオヨゴシマシタ ②同上、母ト子供ノ会話
	14	ザボントバショオノミ		14	センタクニユキマス
	15	ニンギョオノキモノ		15	カゴニノッテ、テラマイリニユキ マス
	16	センタク			
	17	ムラノケシキ			

『話方教材』初版の巻一は、第一学年前半期の十八課と第一学年後半期の十五課に分けてあり、全部で一学年の学習内容となる。前半期の第一課から第八課までの教室用語は、『國民讀本』の五十音を教授する際、同時に教えられる。また、第九課から第十八課までは『國民讀本』巻一の全十課と、そして、後半期の第一課から第十五課までは『國民讀本』巻二の全十五課と対応している。一方、『話方教材』巻二は、第二学年前半期の十七課と第二学年後半期の十五課に分けられてあり、『話方教材』巻二の後半期までは、巻一の第一課から第八課を除けば、『話方教材』と『國民讀本』の間の相対応する課数が同じであることが分かる。しかし、『話方教材』巻二の後半期からは、その内容と『國民讀本』の課目内容との間に多少のずれが見られる。

次に、『國民讀本』と『話方教材』の対応する課目内容に対しては、前者を教える一週間或いは二週間前に、後者の内容を先に教えるとする。また、一課目の教授に使われる時間は最初には一週間であるが、第二学年に入ってから、二週間から三週間もかかることがある。こう考えてくると、当時の授業は『國民讀本』に入る前にすでに簡単な日常会話ができることを前提としていたと言えよう。これは当初の学習目標が三学年の勉強を通して、日本語の日常会話を了解し、習得することが期待されていたことが分かる<sup>8</sup>。また、当時の国語科の教授方針にも「（前略）如此スルコト三年、其間ニ校内用語ヨリ日常用語ノ大略ヲ授ケ了ルコトヲ得ベシ。而シテ、此時期ニ到レバ、已知ノ言語ハ不十分ナガラモ、内地ノ児童ノ就学前ニ家庭ニテ知り得タル母語ト少々同一ノ程度ニ達シテ、茲ニ国語ノ基礎初メテ立テリト云フ可シ。」<sup>9</sup>のように定めている。このように、話し方の授業は国語科にとって全科目の基礎であると見なされ、公学校の前半三年の間に習得された日本語の学力は内地

---

8 『國民讀本参照國語科話方教材』巻一（1900）の緒言 p. 1。

9 『臺灣公學校國語教授要旨』（1900）p. 11。

の就学前の児童それとほぼ同じレベルであることが期待されている。

なお、第一学年の前半期と第二学年の前半期に同じ題名の課目があるのは、長幼不同の生徒が同時に入学する場合、同じように第一巻第八課までの教室用語を教えた後、学習力が強い生徒に対しては、直接第二巻に入ってもよいと緒言<sup>10</sup>に書かれている。

## 4.2 場面設定

話し方教材というものは子供に国語を覚えさせ、他人のことを聞いて理解できたり、自分の意思を伝えたりするのが主要な役割である。そこで、教材の中に現れた場面の考察を通して、学習者にどんな言語力を求めるのかがより分かる。各課の場面を要約すると次のようになっている。

巻一前半では、第一課から第八課までは学校内における行動である。第九課以降は起床→着替え→顔を洗う→掃除→食事→学校への準備→学校での勉強→遊び（独楽を回す）→寝る。

巻一後半では、起床→顔を洗う→髪の毛を切る→駕籠に乗る→道德（来客との対応）→家事（火をおこす、茶を入れる）→買物（紙を買う）→物作り（帳面を作る、凧を作る）→遊び（凧を上げる）→自然（雨が降る）→寝る。

巻二前半では、起床→掃除→知識（鶏についての描写）→家事（鶏の世話）→顔を洗う→食事→学校への準備→学校での勉強→遊び（柱鬼）→手習い→家へ帰る→買物（菓子を買う）→遊び（シャボン玉・目隠し・釣り）→知識（魚についての会話）→自然（夕方）→一日の仕事→寝る。

巻二後半では、家事（水汲み）→道德（水がめに落ちた、水を飲んで病気になる）→家事（米を研ぐ、薪を割る、料理を作る、ご飯を炊く）→買物（豚肉を買う）→知識（百姓との会話）→道德（うまい飯、親子との会話）→知識（ザボンに

---

10 『國民讀本參照國語科話方教材』巻一（1900）の緒言 pp. 4-5

についての描写・食べ方)→道徳(着物を汚した)→家事(洗濯)→寺参り。

以上の内容をまとめてみると、巻一前半・後半と巻二前半における場面は、何れも子供が朝起きてから晩までの一日の動作を順々に課毎に書き綴っていくことが分かる。巻二後半から、身の回りの様々な物事を主題とする内容に変わった。全体的に設定された場面は学校内の学習場面と家や外の場所での生活場面に分けられている。まず、学校内の用語を覚えさせ、次に一日の行動の言い方を習得させ、最後に農工商などの人々と接する場面で、身近な日常生活から社交上まで会話行動の範囲が広くとらえていることが窺える。上で見たように、生活場面に更に生活習慣・家事・買物・物作り・遊び・自然・知識・道徳などについての内容が見られる。生活で実際の行動のほかに、実物についての描写を通して社会知識を伝習し、親子や様々な職業の人との会話で、子供に物の大切さや良い性格など道徳規範の教えをも取り入れた。

なお、内容の構成について、第一学年の前半期では単純に動作の進行変化を説明する文である。教師の指示に従って実際の動作をするのは、ある意味で聞き取りの練習であると言えるが、後半期の第二課に現れた二文を除けば、問答の練習内容が見当たらない。第二学年の前半期の第五課「カオ オ アラウ トキ ノ ハナシ」に入ってから、初めて会話文が現れる。更に、これらの会話文を見ると、顔を洗う時についての会話、食事の時に親子の会話、学校に行く前に友達との会話、買物に出かける時に親子の会話、子供は店の人(菓子屋、豚肉屋)との会話、魚についての会話、家事を手伝う時の会話など、様々な場面や登場人物が見られる。そして、これらの会話文はほぼ題名の第二タイトル(表1の目次に②が付いたところ)にある。これは第一タイトルで新出語彙や文型の導入が定着してから、第二タイトルの会話文で実際の応用練習を行うと考えられる。また、第二学年の第三課で「～であります」を使って、実物についての描写文が窺える。第一学年よりも第二学年の内容が豊かになった。

### 4.3 文法事項

前にも述べたように、当時日本語の基礎を立てるために、『國民讀本』前半の六巻は『話方教材』と提携して使われていたことから、話し方科の重要性が窺える。言語形式の教授に焦点を置いた初級段階では具体的にどんな内容であろうか。

『話方教材』巻一・巻二における各課の主要文法事項は提出順によって羅列すると次のようである。以下の N は名詞（多数の場合、N1、N2 のように表記される。以下同じ。）、V は動詞、A は形容詞語幹、AV は形容動詞語幹を示す。なお、課目に新しい文型が現れない場合、その内容を提示しない。

#### 巻一（第一学年前半期）

第一課：N オ V マス。／V マス。

第八課：（場所）ニ V マス。／（場所）オ V マス。／N ガ V マス。／

N1 ガ N2 オ V マス。／（場所）エ V マス。

第十課：N1 ニ N2 オ V マス。

第十二課：（道具）デ V マス。／N オ V テ キマス。／N1 ト N2。

第十四課：（相手）ニ N オ V マス。／イッショ ニ V マス。／（到達点）ニ V マス。

第十五課：「……」ト イイマス。

第十七課：A ク ナリマス。

第十八課：N ニ ナリマス。

#### 巻一（第一学年後半期）

第二課：N ガ アリマスカ。／（場所）ニ アリマス。／N1 オ N2 ニ V ナサイ。／  
V マシタ。／A ク V マスカ。／A ク V マス。／N オ アゲマス。

第四課：N1 ノ N2。／N オ ヤリマス。

第六課：（相手）オ V マス。

第八課：V1 テ、V2 マス。

第九課：(相手)ニ アゲマス。

第十課：Nオ モライマス。

第十二課：N1ニ N2オ モライマス。

第十三課：Aク Vマシタ。

卷二 (第二学年前半期)

第一課：Nガ Vマセヌ。／Nガ Aイ。／(場所)デ Vマス。／(場所)カラ Vマス。

第二課：(道具)デ N2オ Vマス。／V(連体修飾形)+N。

第三課：コレワ Nデ アリマス。／N1ワ N2デ、N3ワ N4デ アリマス。／N1ワ N2ガ Aイ。／N1ガ AVデ、N2ガ Aイ。／アマリ AVデ アリマセヌ。／ソオシテ、～。／Aイ+N。／文1、ケレドモ、文2。／N1ワ N2オ Vマセヌ。

第四課：Nオ Vテ ヤリマス。／N1ニ N2オ ヤリマス。／ソレカラ、～。／N1ワ N2オ Vテ シマイマス。／(目的)ニ ユキマス。

第五課：[N1オ V](連体修飾節)+N2。／文1 カラ、文2。／N1ヤ N2ヤ N3オ Vマス。／マダ Vマセヌ カラ。／Vマシヨオ。／Vテ アゲマシヨオ。／A イデスカ。／アマリ Aイ。／コレ デ ドオ デスカ。／Vテ クダサイ。／A イデス。

第六課：モオ Nガ Vマシタ カ。／Vテ アリマス。／ナニ オ Vテ イマスカ。／Vテ イマス。／Nモ～。／Nガ アリマセヌ。／A Vデ アリマス。／チョット Vテ クダサイ。

第七課：ソノ トオリ ニ Vマス。／(時間)マデ Vマス。

第八課：(数詞・助数詞)ノ N。／マタ、～。

第十課：Nデ ゴザイマスカ。／コノ Nワ (数量)イクラ デスカ。／(数詞・助数詞)ダケ クダサイ。



第十一課：スコシ Vマス。／Vマス ト、～。

第十二課：タクサン ノ N。／Vラレマセヌ[可能]。

第十三課：イソイデ～。

第十四課：～ノ デス。／「……」ト イウ Nデスカ。／コレワ Nデスカ。／

V1タリ V2タリ シマス。／Nガ ナイ ト イケマセヌ カ。／

Nガ イマス。／Vタイ デス。／オVナサイ。

第十六課：(時間)ニ Vマシタ。／Vテ カラ、～。／Nト イッショ ニ～。／

Nデ アリマショオ。

## 卷二(第二学年後半期)

第一課：AV ニ ナリマス。

第二課：Vヨオ ト シマシタ。

第三課：(理由)デ、Nニ ナリマシタ。／Vセマシタ。[使役]／V1 ナイデ  
V2マシタ。

第五課：Vコト ガ デキマスカ。／Vマセヌ カ。／Vテ オイデナサイ。

第八課：オVクダサイ。

第九課：Vテモ、～。／Vタ コト ガ アリマセヌ カ。／Aイ デショオ。／  
Aク アリマセヌ。／～ホオ ガ ヨロシイ。

第十課：Vハジメマシタ。／Aク ナイ。

第十一課：Vタク アリマセヌ。／Vテ ゴランナサイ。／ソレナラ、～。

第十二課：Vテ イマス[状態]。／Aクテ、～。

第十三課：Nデ[理由]、～。／～とき／Vテ モライマシタ。／(疑問詞)モ V  
マセヌ。

上の表現形式を表現意図から整理してみると、次のようなものがある。(1) 名  
詞：人・物・事(2) 指示：こそあど系統(3) 引用：～という(4) 変化：なる  
(5) 存在・有無：ある、いる(6) 命令：なさい(7) 授受：やる、あげる、もら

う、～てあげる、～てもらう (8) 逆接：けれども (9) 期待外れ：～てしまう  
(10) 原因・理由：て、で、から、～のです (11) 勧誘：ましょう (12) 提案：どう  
うですか (13) 依頼：～をください、～てください、～ないでください、お V くだ  
さい (14) 仮定：～と～ (15) 可能：～ことができる、～られる (16) 定義：～と  
いう N (17) 希望：たい (18) 並立（動作等）：～たり～たり (19) 時間関係：～  
てから、～時 (20) 意志：～ようとする (21) 使役：～せる (22) 経験の有無：～  
たことがある (23) 推量：でしょう (24) 比較：～のほうが～ (25) 開始（動  
作）：V はじめる (26) 試行：～てみる (27) 状態：～である、～ている (28) 義  
務：～ないといけない (29) 接続：そうして、それから、それなら (30) 時刻：～  
時、～時半 (31) 数の言い方 (32) 助数詞の各種。

これらの基本的な文法事項の表現意図を子供に十分に習得させ、それを身に付け  
れば、簡単な日常会話ができるという期待が窺える。

次に、巻一の文体を見ると、後半期に現れた五文の「～ました」、二文の「～ま  
すか」を除けば、全ての文は「～ます」で表記されることが分かる。全体では、新  
出語彙の名詞と動詞を「N オ V マス」「N オ V マシタ」という文型で導入する。

「～ます」を使って動作の順序を導入することは正しくゴアン氏言語教授法に沿っ  
て作った教材の特徴であると言えよう。これによって、入門期の学習者に内容の理  
解・記憶が、更に効果的であるという編纂者の意図が考えられる。また、文末の提  
出順（下線のところ）について、「ます」→「ますか」→「ました」→「ません」  
→「であります」→「ではありません」→「ですか」→「です」→「ましたか」→  
「でございますか」→「ませんか」のようにになっている。

#### 4.4 仮名遣い

『話方教材』の仮名遣いは『國民讀本』と同じく、表音的仮名遣いを用いた。こ  
こで言う表音的仮名遣いは次の通りである。①助詞「ヲ・ハ・ヘ」を「オ・ワ・

エ」で表記する。②お列長音「ウ」を「オ」で表記する。例えば、「イモオト」(妹)。③お列拗音の長音「ウ」を「オ」で表記する。例えば、「ギョオギ」(行儀)。④二語の連合により生じた「ヂ」と「ヅ」は「ジ」と「ズ」で表記する。

#### 4.5 分かち書き

- ①『話方教材』初版の内容は原則的に単語ごとに分かち書きをした。助詞は独立して、全角スペースを一つ離して書く。

(巻二 p.33-7) ココ ワ ナン ト イイマス カ。

(巻二の 33 頁第 7 行は (巻二 p.33-7) と示す。以下同じ。)

但し、原則に違うところが見られる。

(巻一 p.29-4) ユオ タライ ニ イレナサイ。

(巻二 p.32-6) イマ ツリマシタカ。

- ②動詞の連用形+助動詞の場合、原則として分かち書きをしない。

(巻一 p.1-6) テ オ アゲマス。

(巻二 p.12-7) ワタクシ モ タベマシヨオ。

- ③動詞の連用形+「て」+補助動詞の場合、前半に「て」が付いたところは原則として分けない。そして、後半の補助動詞は独立して表記する。

(巻二 p.16-2) ホオキ オ モッテ キマス。

(巻二 p.67-1) イマ、ナ オ アラッテ イマス。

但し、例外もある。

(巻一 p.16-2) ホオキ オ モッテキマス。

- ④形容動詞の語幹は「に」にくっ付いた場合は分かち書きをする。

(巻二 p.58-3) キレイ ニ アライマス。

- ⑤形容詞の語幹は「く」にくっ付いた場合は分かち書きをしない。

(巻一 p.50-4) タコ ガ タカク アガリマシタ。

(巻二 p.35-5) ソラ ガ アカク ナリマス。

原則として、形容詞の後ろの動詞は独立して書くが、例外が見られる。

(巻一 p.51-4) ソラ ガ クロクナリマス。

⑥「～に」がついて副詞を形成するものは、分かち書きをする。

(巻一 p.19-4) イッショ ニ アルキマス。

(巻一 p.94-8) コノ コ ワ サキ ニ ネマス。

⑦漢語サ変動詞の場合、「する」が漢語にくっつく。

(巻一 p.37-8) オキャク オ アンナイシマス。

## 4.6 語彙の分析

外国語教育を実施するとき、文法や発音が重視されることは勿論であるが、文法の説明に入る前にもっとも早く教授するのは語彙である。基本的な語彙がなければ、言語の習得が困難なことであると言えよう。教科書の語彙を調査することによって、当時の言語状況、生活、文化、社会背景などもより深く分かる。植民地時代の日本語教育を通して、台湾人児童に何を伝えようとしたのかを究明するために、語彙分析の価値がある。ここで、語彙量及び意味上から分析した。

### 4.6.1 語彙量

『話方教材』は『國民讀本』の副教材として編纂されたが、実際の教材の中に使われた語彙量<sup>11</sup>はどのぐらいあるのか、品詞別の比率はどんな様相を呈しているかについて調べた。

語彙調査及び品詞分類は次のような基準で行った。まず、品詞分類は学校文法（橋本文法）により、名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・感動詞・連体詞・接続詞・助詞・助動詞の十大品詞に分類する。品詞の認定は『大辞林』（松村明、三省堂、2004年）に従い、以下の通りに設定する。

---

11 ここで異なり語数をさしている。

- ① 動作性の名詞、副詞に直接続く「する」は切り離して、それぞれ一単位とする。
- ② 動詞、形容詞の活用語については原則として終止形に変えて採る。
- ③ 形容動詞は語幹の形で採る。
- ④ 複合語は原則として一単位とする。
- ⑤ 助詞、助動詞は各々一単位とする。
- ⑥ 数を表わす要素を含んで一単位とする。
- ⑦ 人名、地名はそれぞれ一単位とする
- ⑧ 話し手、聞き手を計算しない。

ここで、『國民讀本』の語彙量と比較するために、『話方教材』巻一、巻二の語彙量を第一学年前半期・後半期および第二学年前半期・後半期に分けてそれぞれ学期ごとに計算した。その結果は表 2 の通りである。

まず、『話方教材』の巻一と巻二の異なり語数を計算した結果、総計 1223 語である。一方、参考するために、それと対応する『國民讀本』巻一から巻四までの異なり語数を取り上げておくと、総計 554 語である。『話方教材』の語彙量が『國民讀本』の二倍余りであることが分かる。各学期の語彙量を見ても、どれも『話方教材』のほうが多い。

(表 2) 『話方教材』 巻一・巻二と『国民讀本』 巻一～巻四との語彙量

話方教材	巻 別	一		二		
	学 期	前 半	後 半	前 半	後 半	総 計
	異なり語数	166	228	405	424	1223
	延 べ 語 数	918	1085	2108	2580	6691
	百 分 比 (%)	18.1	21	19.2	16.4	18.3
國民讀本	巻 別	一	二	三	四	総計
	異なり語数	110	96	159	189	554
	延 べ 語 数	323	569	967	1253	3112
	百 分 比 (%)	34.1	16.9	16.4	15.1	17.8

注：表 2 における百分比は「異なり語数」を「延べ語数」で割ることによって得られ、各学期に現れた一語あたり平均使用の比率である。

なお、両者の延べ語数については、『話方教材』二巻は 6691 語であり、『國民讀本』四巻は 3112 語である。異なり語数にしても延べ語数にしても、『話方教材』のほうが多い。『話方教材』は『國民讀本』の副教材として編纂されたが、語彙量から見れば、初級段階の話し方科では多くの教授時間を使って大量の語彙を導入することは、その後の読み方科に入るための準備作業であると言えよう。話し方科は正に国語科全体の基礎を築いたのである。

更に『國民讀本』の異なり語数が延べ語数に占める比率を見ると、ほぼ巻数の増加に従って段々減っていく現象が窺える。これについて、初級の段階においては、新しい単語がどんどん提出されるが、学年が進むにつれ、巻ごとに分量が増えるが、新出単語がそれに対応して増加せず、ただ同じ語（異なり語）が何回も繰り返し使われているからであろうと、蔡（2002,p.389）は述べた。これに対して、『話方教材』はこのような現象がなく、むしろ巻一後半期のように異なり語数の比率が増え

る結果が見られる。学期の増加につれて、異なり語数が増えていく傾向がある。なお、異なり語数の使用率としては、『国民読本』巻一の 34.1%に対して、『話方教材』巻一前半は 18.1%しか占めていない。『話方教材』巻一前半の語彙は『国民読本』ほどよく使われていないが、語彙の種類がより多いことが分かる。

次に各品詞の異なり語数とその占める比率を調べてみた。結果を表 3 にまとめた。表 3 に見られるように、巻一前半及び後半において、全体の中に占める比率は最も高いのは動詞であり（48.2%、46.1%）、次は名詞（45.2%、42.5%）である。これに対して、巻二前半及び後半は最も多いのが名詞（45.7%、43.9%）で、次は動詞（36.3%、35%）である。これらに比べると、他の品詞は極めて少ない。両者とも名詞と動詞を合わせれば、ほぼ全体の 80 パーセント以上の比率にも達した。これは入門期の教科書の特徴とも言えよう。

（表 3）『話方教材』巻一・巻二の品詞分布

			名詞	動詞	形容	形動	副詞	感動	連体	接続	助詞	助動	総計
巻一	前半	異数	75	80	2	0	0	1	0	0	7	1	166
		百分比	45.2	<u>48.2</u>	1.2	0	0	0.6	0	0	4.2	0.6	100
	後半	異数	97	105	11	0	2	2	0	0	9	2	228
		百分比	42.5	<u>46.1</u>	4.8	0	0.9	0.9	0	0	3.9	0.9	100
巻二	前半	異数	185	147	21	4	15	3	1	4	17	8	405
		百分比	<u>45.7</u>	36.3	5.2	1	3.7	0.7	0.2	1	4.2	2	100
	後半	異数	186	148	25	5	20	6	1	5	17	11	424
		百分比	<u>43.9</u>	35	5.9	1.2	4.7	1.4	0.2	1.2	4	2.6	100

なお、ここで両者に最も高い比率を占めている品詞の違いが見られる。参考するために、『國民讀本』の品詞別語彙量を取り上げてみると、全体的に名詞が最も多いことが分かる<sup>12</sup>。『話方教材』巻一に動詞が最も多いこと、そして巻数の増加につれて、現れた動詞の比率が少なくなっている傾向が見られるのはなぜだろうか。理由としては、この教科書は動詞が重視されるゴアン氏言語教授法の概念で編纂されたので、初級段階の巻一にたくさんの動詞を取り入れたことが考えられる。その後、学年が進むにつれて、基本的な動詞が繰り返して現れて、ある程度定着すると同時に、他の品詞の比率が高くなるのではないかと思われる。

なお、台湾生活の実情を描写するために、日本語にない単語は台湾語を借用し、日本語の中に混じることが窺える。蔡（2002,p.400）の語彙調査によると、『國民讀本』には巻七から仮名で台湾語の発音を表記する単語が取り入れられたことが分かる。これに対して、『話方教材』にはそれよりも早く第二学年後半期第十五課から仮名で台湾語の発音を表記する単語が見られる。それは寺で爆竹を鳴らす場面で現れた「パウ ア」（爆仔）という語である。しかも、それが『國民讀本』全十二巻にない台湾語の単語である。日本語教育の推進によって、日本文化を導入すると同時に台湾本土の文化も重視した一面が窺える。

#### 4.6.2 意味上から見る語彙

教材に提出された名詞は意味から次のように分類された。（教材では片仮名で表記されるが、ここでは漢字や平仮名で表記される。）

衣（着物、靴、袖、袴、紐、帽子、ボタン、櫛）、食（食事。食べ物：菜、汁、飯、茶、魚、鰻、菓子、卵、昼飯、夕飯、朝飯、米、肉、ザボン。食器：匙、箸、碗、茶碗、茶壺、急須、皿、杓子、杓文字、食卓、鍋、鉢、包丁、俎板、食台、盆、米櫃、飯櫃）、住・寝具（蚊帳、蚊遣り、寝台、寝間、寝巻、布団、枕、家、戸、

---

12 蔡（2002）p. 394。



戸口、部屋、門、池、勝手、門口、門、鳥屋、便所、窓、庭、道)、遊び(独楽、  
凼、遊び、柱、鬼、柱鬼、目隠し、シャボン玉、鬼ごっこ)、体(肩、髪の毛、体、  
口、首、片手、喉、腹、膝、両手)、位置(上、内、下、外、前、横、側、よそ、  
先、中、真ん中、方、間、斜め、左、右、脇、縁)、場所(学校、教場、広場、ゴ  
ミため、店、岸、ところ、場所、市場、寺、町、水際、村)、人称関連(父母、父、  
母、お父さん、お母さん、おじさん、兄さん、弟、妹、あなた、私、友達、内の人、  
お客、子供、子、人、皆、自分)、時刻(朝、夜、明日、今、時、夕方、後、初め、  
昼、前、日暮れ、仕舞い)、自然(火、雨、風、雲、空、日、星、山、天気、田、  
畑、水、石、湯気)、動物(雄鶏、雀、鳥、鶏、雛、豚、雌鶏、蚊、蚯蚓、羽、鱗、  
鰭、鮎)、植物(竹、芋、大根、種、葉、花、実)、職業(仕事、駕籠舁き、百姓、  
紙屋、床屋、菓子屋、肉屋)、家事(ゴミ、埃、塵取り、たらい、手拭い、はたき、  
ほうき、ゴミ取り、雑巾、掃除、掃除番、米研ぎ、洗濯、薪割り、水汲み、飯炊  
き)、授業関連(字、生徒、先生、札、紙、硯、墨、石盤、石盤拭き、石筆、包み、  
筆、風呂敷、本、稽古、手習い、手本)、数量関連(数字。人、日、羽、匹、厘、  
銭、時、枚、斤、度、遍、本、半分)、疑問詞(いくら、何、いかほど、いくつ、  
いつ、どこ)、指示(それ、あちら、ここ、この、これ、こちら、そこ、あそこ)、  
その他:(①日用品・道具: 駕籠、蓋、団扇、傘、炭、銭、タバコ、帳面、糊、骨、  
シャボン、管、浮き、竿、釣竿、釣り道具、板、金紙、薬、線香、手籠、水瓶、椅  
子、糸、糸巻き、紙縫り、笠、ねじ、火屋、マッチ、水入れ、ランプ、針、剃刀、  
錐、切れ、小刀、縄、担い棒、秤、袋、棒、斧、割台、焔炉、薬缶、桶、籠、竈、  
瓶、糸目、尾(凼の尾)、束、芯、湯、油)②気、声、一緒、案内、値段、話、会  
話、事、通り、外、休み、用事、仲、心持、心配、手伝い、日々、返事、準備、お  
つり、怪我、力、病氣、寺参り、仏様、別、外、割れ目、穴、程)

以上のように、日常生活の行動、品物から抽象的な概念が含まれる語彙まで、多  
様な語彙が網羅されることが窺える。

#### 4.7 指導法

前述したように、当時の「国語科」は「国語・作文」「読書」「習字」というように別々に教えられていたことが分かる。話し方科で使われていたゴアン氏教授法は一体どんな実態であるか。実際の教授案<sup>13</sup>の一部分を掲げて説明したい。教授項目は『話方教材』巻一前半期の第13課「メシ オ タベマス」における「チャワソ サジ オ オキマス」という文である。以下は既に教えた内容の復習について、教師と生徒との間の問答内容である。（教）は教師、（生）は生徒を示す。

（教）：此禮拜學甚麼事情。

（生）：食飯的事情。

（教）：先生甚麼物提出來認真看。と注意しチャワソを示し、、、、、これは何ですか。

（生）：チャワソデアリマス。（数生に云はしめ後斉唱）。

（教）：（サジを示し）之は何です。

（生）：サジデアリマス。（数生に云はしめ後斉唱）。

（教）：（次に飯櫃を示し）此内面有甚麼物。

（生）：メシ。（数生に云はしめ一斉云はしむ）。（中略）

（教）：食飯の時預先要創甚貨。

（生）：チャワソ オ モチマス。（数生に云はしめ後斉唱）。

（教）：それからどおしますか。

（生）：メシ オ モリマス。

（教）：（メシを盛る動作を示し）如此欸國語講怎樣。（中略）

（教）：此二句連續講誰人會曉。

（生）：チャワソ オ オキマス。 サジ オ オキマス。（中略）

---

13 長井（1903）pp. 21-30。

(教) : 此二句做一個講按怎樣即好。

(生) : チャワン ト サジ オ オキマス。

以上のように、授業の最初は既知の名詞について実物を指して問答する。次に、日本語で「それから、どうしますか」、或いは動作をしながら台湾語で「如此欸國語講怎樣」といった質問を使って、ご飯を食べる時の一連の動作を生徒に次々と言わせる。最後に、二つの文を繋げて一文が言えるように指導する。ここで目立っているのは教師が日本語と台湾語を混ぜて教授することである。これについて、「始めゴアン氏法案によって教授法が行われた際には、対訳を廃し土語を使用しないことを望んだけれども、話し方教授の初期に於いては、教材の内容即ち言葉の意味である事実を土語にて説明し、然る後、それを直観方便に移して国語を授けることを許したのであった」<sup>14</sup>と山口喜一郎氏が説明したように、なるべく母国語を使わないが、生徒に理解させるために最初に多少の台湾語を使ってもかまわないことが分かる。しかしながら、この時の台湾語は領台当初の「対訳法」における台湾語と少し違って、語のもつ観念と語音との直接の連結を生徒に喚起させる働きが窺える<sup>15</sup>。ただ、後に学年が上がるにつれて、台湾語の使用の度合いが徐々に減ることになっている。

## 5. おわりに

本稿では、『話方教材』初版の巻一・巻二における教材の配置、場面設定、文法事項、仮名遣い、分かち書き、語彙分析および指導法などの究明を通して、当時の日本語会話教育の実態が更に分かる。しかしながら、本稿の分析内容はただその中

---

14 山口 (1943) p. 132。

15 『臺灣公學校國語教授要旨』 (1900) p. 14。

の一部分なので、まだ十分な研究とは言えない。これを基に、ほかの巻の内容をより深く考察したい。そして、後にゴアン氏言語教授法をめぐって議論されたことによって、明治 39 年に出された『話方教材』の改正版は初版とどこが違うのか、分析する課題が残る。

## 参考文献

國府種武『臺灣に於ける國語教育の展開』第一教育社、1931。

國府種武『日本語教育の實際』東京書籍、1939。

蔡錦雀『日本植民地時代の台湾公学校用国語読本の研究』久留米大学博士論文、2002。

臺灣教育會『臺灣教育沿革誌』南天書局、1939。

臺灣總督府『國民讀本參照國語科話方教材』卷一、1900。

臺灣總督府『臺灣公學校國語教授要旨』、1900。

長井教生「國語科實地授業」『臺灣教育會雜誌』第 15 号 21－30 頁、臺灣教育會、1903。

山口喜一郎『日本語教授法原論』新紀元社、1943。